

# 城を知ろうとするはなし

—地理情報からみた京丹波町の中世山城分布と三ノ宮東城跡—

加藤雅士

## はじめに

三ノ宮東城跡は京都府船井郡京丹波町三ノ宮に所在する中世山城である。隣接する三ノ宮西城跡と共に土佐山内氏に関わる伝承が地元に残っていることも<sup>(注1)</sup>あり、知る人ぞ知るといような存在の城跡であったが、京都縦貫自動車道丹波綾部道路の建設に先立ち平成23年に<sup>(注2)</sup>全面的な発掘調査がおこなわれた。調査の結果、垂直方向に配置された大小合計8つの曲輪とそれらをつなぐ城内の通路がみつき、巧みな城づくりの様子が明らかになった。主郭である曲輪1からは中心的建物と考えられる礎石建物が検出され、各所に土塁・堀切・塹堀・石積が設けられていた。出土遺物には鉄形台や筭などの武具類、建築に関わる鉄器、銭貨などがある。土器類では中国製陶磁器が多く出土している点特徴的である。その分布範囲などから日常的に人が駐在していたと考えられ、16世紀前半を中心とする時期につくられ、16世紀中頃まで存続した城であると評価された。

このほか三ノ宮東城跡で注目される点として、城跡の立地がある。城跡は南北にはしる綾部街道(国道173号)に対し、東西道路(府道26号)が交差する位置にある。このことから報告に際して筆者は、「交通の要衝に位置する城跡である」と評価したが、“より広い範囲でどう意義付けるか?”、という点には課題を残していた。そこで今回は、京丹波町内における中世山城の分布を地理的な諸条件から考えてみたい。中世山城の分布が、地形や地理条件、街道によってどのような影響を受けているのか検討したうえで、改めて三ノ宮東城跡について考えてみたい。

## 1. 京丹波町の地理と中世山城の分布

南北に長い京都府のほぼ中央付近に京丹波町はある(第1図)。京丹波町は平成17年に和知町・瑞穂町・丹波町が合併し発足した自治体である。南は



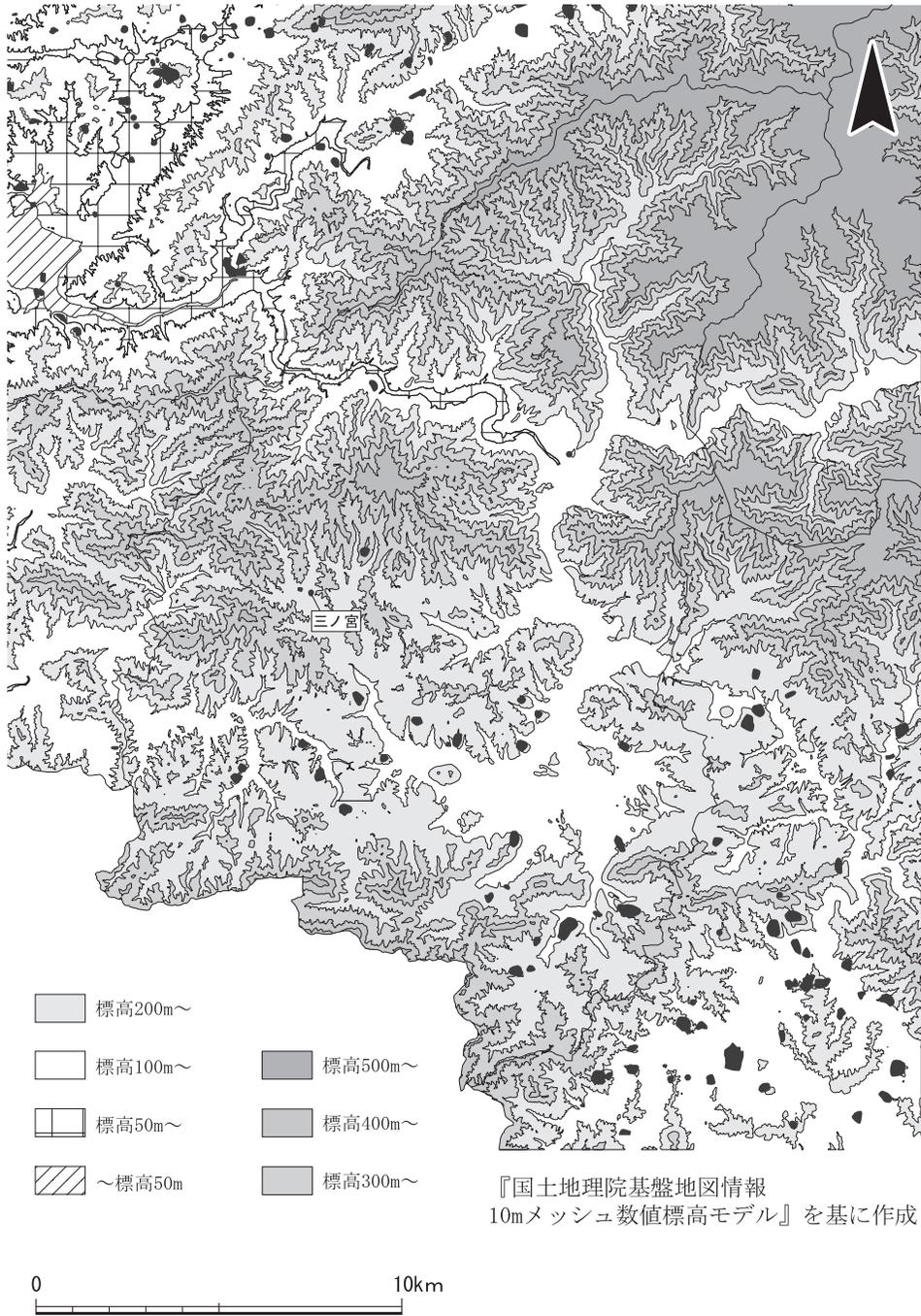
第1図 京丹波町の位置



- |           |           |            |
|-----------|-----------|------------|
| 1. 三ノ宮東城跡 | 11. 坂井城跡  | 21. 実勢城跡   |
| 2. 三ノ宮西城跡 | 12. 井脇城跡  | 22. 曾根城跡   |
| 3. 八幡山城跡  | 13. 和田城跡  | 23. 塩田北城跡  |
| 4. 出野城跡   | 14. 垣内南城跡 | 24. 塩田城跡   |
| 5. 市場城跡   | 15. 垣内城跡  | 25. 上野城跡   |
| 6. 薬師寺跡   | 16. 橋爪西城跡 | 26. 須知城跡   |
| 7. 鎌谷城跡   | 17. 橋爪城跡  | 27. 水戸殿谷城跡 |
| 8. 鎌谷南城跡  | 18. 宇津木城跡 | 28. 水戸城跡   |
| 9. 八田城跡   | 19. 富田城跡  | 29. 高岡下村城跡 |
| 10. 井尻城跡  | 20. 豊田城跡  | 30. 高岡中村城跡 |
|           |           | 31. 中畑城跡   |

(京都府教育委員会2013を基に作成)

第2図 京丹波町の中世城館



第3図 標高と山城の分布

兵庫県と接していて、西は綾部市・福知山市、東は南丹市と接している。船井郡は京丹波町全域と南丹市南域にあたる。町域全体は丹波高地に属しており、そのほとんどが山地であり、河川がつくる谷底平野に集落が分散して存在している。

『京都府中世城館跡調査報告書』<sup>(注3)</sup>によると京丹波町内には31の中世城館跡が存在する<sup>(注4)</sup>(第2図)。その分布をみると、ほとんどが町域の南部にあり、北部に分布するものは僅かであることが分かる。

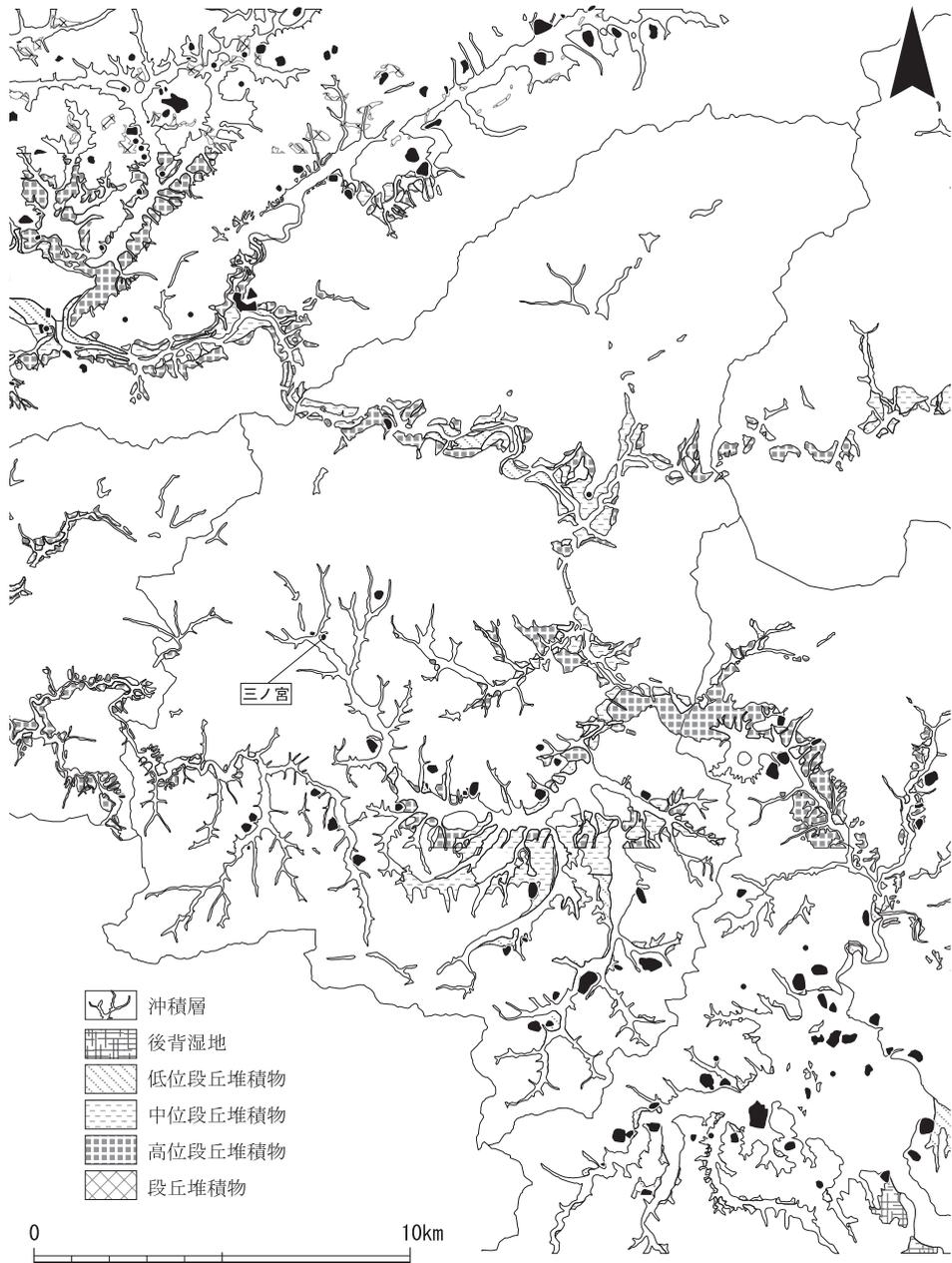
1) 標高 京丹波町の標高分布をみると、基本的にすべてが100m以上の標高であり、北西部の由良川流域で例外的に標高50~100mの地域があるのみである。概して北部で標高が高く平野部が少ない(第3図)。これに対し南部では、高屋川の中・下流域に加え、曾根川、須知川、土師川流域において比較的平野部が広く、山地であっても標高200m台のものが多い。これを城の分布と重ね合わせてみると、南部の平野部周辺に山城が築かれている場合が圧倒的に多いことが分かる。ただし、ここで注意しなければならないのは、あくまで平野部“周辺”という点である。『京都府中世城館跡調査報告書』のデータを基にすると、南部の平野部周辺に所在する城(第1図の6~31)の最高所の標高は平均268mで、周辺集落等との比高は平均84mである。よって山城の立地は、平野部を望む位置に作られているとすることができる。

2) 地形(地質) つぎに地形との関連を検討してみたい。ここでは良質なデータが充実している地質図をもとに検討する(第4図)。京丹波町の地形区分をみると、大部分を山地が占めている。北部では東西に由良川が流れており、これに沿って高位・中位段丘が発達している。南部では高屋川、曾根川、須知川、土師川に沿って、主に中位の段丘地形がみられるとともに、沖積層の地帯が発達している。この沖積層地帯は、地形区分では谷底平野に相当する。

山城の分布と重ね合わせてみると、町の南部では先にも述べた通り、沖積層(谷底平野)には城は立地していない。また、段丘上にある例が少ないことも注目される点であり、完全な山地に立地していることが分かる。沖積層地帯は河川的作用によりつくられていることから土地が肥えており、可耕地として利用される場合が多い。言い換えれば町南部の山城の立地は、可耕地を望む位置に城がつくられていると指摘することも可能である。<sup>(注5)</sup>

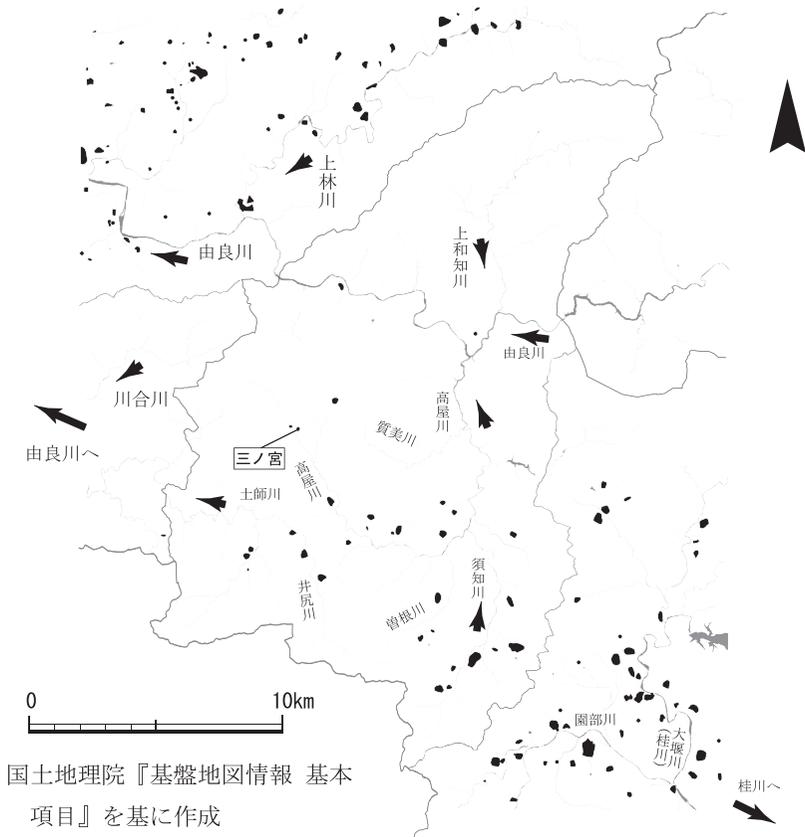
一方の町北部に目を転じると、由良川流域では段丘は発達しているものの、沖積層(谷底平野)が極めて少ない点に気が付く。由良川は京都府北部の代表的な河川であるが、京丹波町内においては平野部をつくる作用をおこなっておらず、町北部の可耕面積が狭くなっている。

3) 水系 ここで、京丹波町内での河川の流れを整理しておこう(第5図)。繰り返し述べ



以下を基に作成した。 猪木幸男・黒田和男・服部 仁「舞鶴」、広川 治・磯見 博・黒田和男「小浜」、木村克己・牧本 博・吉岡敏和「綾部」、木村克己・中江 訓・高橋裕平「四ツ谷」、井本伸広・松浦浩久・武蔵野 実・清水大吉郎・石田志朗「園部」、井本伸広・清水大吉郎・武蔵野 実・石田志朗「京都西北部」  
いずれも産業技術総合研究所地質調査総合センター5万分の1地質図

第4図 地質(地形)区分図



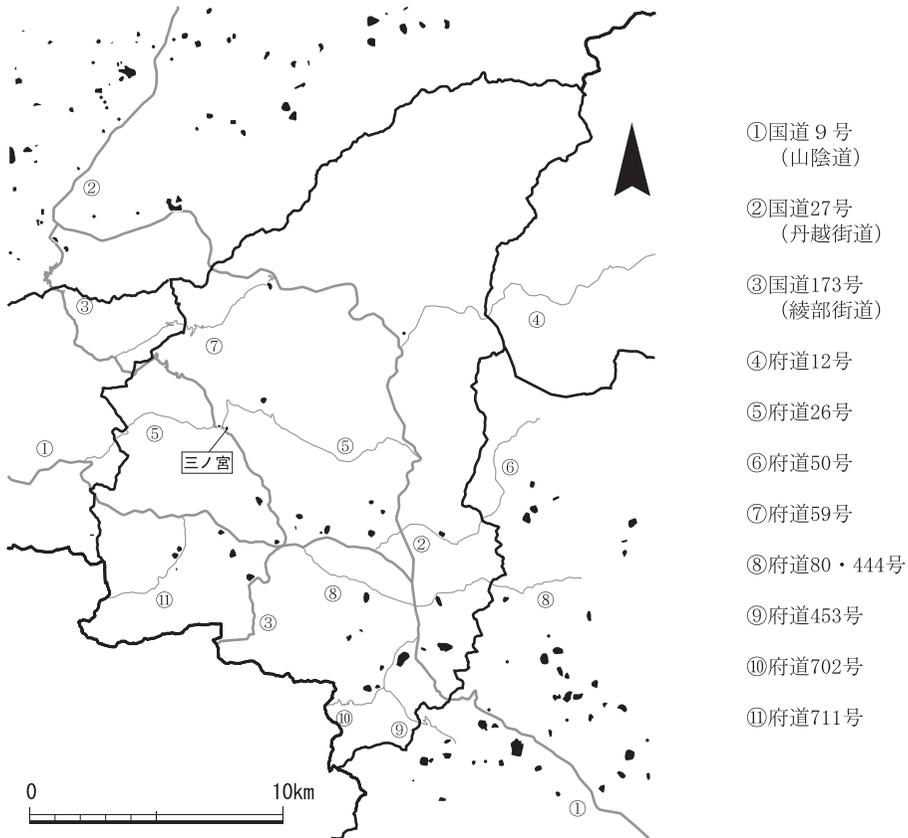
第5図 水域と山城の分布

ているとおり、町の北部では由良川が西流しており、これに対して北から上和知川、南から高屋川が流れ込んでいる。とくに高屋川は町の西部からU字を描いて流れており、町の南部に広い平野部を作っている。町の南西部では土師川が西流しているが、これは福知山で由良川に合流する。京丹波町と南丹市の境はほぼ分水嶺に相当しており、南丹市にある園部川などが桂川・淀川を通じて太平洋側へ注ぐのに対し、京丹波町内の河川は由良川を通じて日本海側へ注ぐ。

城の分布と重ね合わせてみると、由良川流域での城の少なさが注目される。京丹波町内では出野城跡(4)と市場城跡(5)のみである。由良川などの大河川は、水路として軍事上も重要な意味を持っていたと想像できる。出野城跡などの城は由良川を監視するような性格を持っていたと考えられる反面、そうした城の数は、意外なまでに少ない。

先にも述べた通り京丹波町内では可耕地を望む城が多い。町北部の由良川流域では沖積層が発達していないことから、可耕地を望む性格の城が少ないものと考えられる。

4) 街道 京丹波町を外部と繋ぐ道を、現在の国道と府道を中心にまとめた(第6図)。か



第6図 街道と山城の分布

つての道を復原するため、米軍が1947年に撮影した航空写真などを参考にした。

まず主要な道として、山陰道を踏襲するとされる国道9号が町域の南部を東西にはしっている。現在の国道9号は京都市から亀岡市、南丹市を經由して京丹波町に至り、福知山市へ抜けている。この道に対して、京丹波町内では国道27号と国道173号が交差している。国道27号は丹越街道の別称をもつ道である。京丹波町蒲生付近において、現在の国道9号と交わる場所から始まり、由良川に沿って綾部市まで至る。その先は、舞鶴市を経て福井県の敦賀市までを結んでいる。一方の国道173号は綾部街道の別称がある道である。兵庫県篠山市方面から京丹波町に至り、京丹波町和田付近で現在の国道9号線と交差している。その後、高屋川流域を北にはしり、綾部市に入ったところで国道27号と合流する。

これらの街道と山城の分布を重ね合わせてみると、町域南部において、現在の国道9・27・173号が交差する付近では比較的山城が多く認められる。しかし、それより北の地域になると城の分布が極めて少なくなっていることが分かる。これは丹越街道や綾部街道と



いった主要で、かつ軍事上も重要であったと考えられる街道であっても同様である。これは、先に由良川流域でみた山城の分布と似た状況である。その一方で、三ノ宮東城跡(1)や三ノ宮西城跡(2)のように、町南部の平野部から離れた所において、街道に面して立地する城が存在している点も見逃せないだろう。

5) 小結 ここまで見てきた、京丹波町内における中世山城の分布を纏めてみると以下ようになる。

①町南部に分布が集中している。②町南部に存在している山城は、可耕地を望む山地につくられている。③河川を望む位置につくられた山城があるが、その数は多くない。

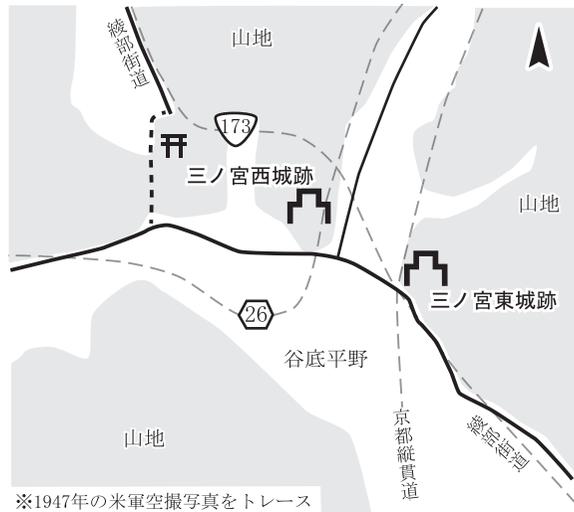
## 2. 三ノ宮東城跡の立地

前章では様々な地理的条件と山城の分布を対照して検討した。では三ノ宮東城跡の場合ではどうであろうか。

京丹波町内の位置としては、南部の山城が集中している地帯からやや北に外れた場所に位置している。最高所の標高は281mで周辺との比高は35m。城の前には谷底平野が広がっているが、高屋川の上流域にあたるため、平野部は広くない。高屋川も流れの広い川ではない。このようにしてみると、前章でみられた①～③の特徴にはあてはまらないようである。

三ノ宮東城跡で注目されるのは、綾部街道との関係である。街道は城のすぐ東において、北西—南東方向にはしっている。三ノ宮付近は、高屋川がつくる谷底平野のほぼ北端にあたる。現在では高架やトンネルで整備されているが、綾部街道を通過して福知山方面(何鹿郡)へ抜けようとする、三ノ宮から北(北西)ではヘアピンカーブのような狭い山道を通り、郡境の榎峠を越えてゆかねばならない。つまり、郡の入口となる街道の峠を控えた場所に城は位置している。常駐しながら街道を監視するにはうってつけの場所であったであろう。

また、三ノ宮付近では、綾部街道と現在の府道26号が交差している。府道26号は質美川、高屋川がつくる谷筋を繋ぐ東西道路であり、丹越街道、綾部街道、山陰道といった主要

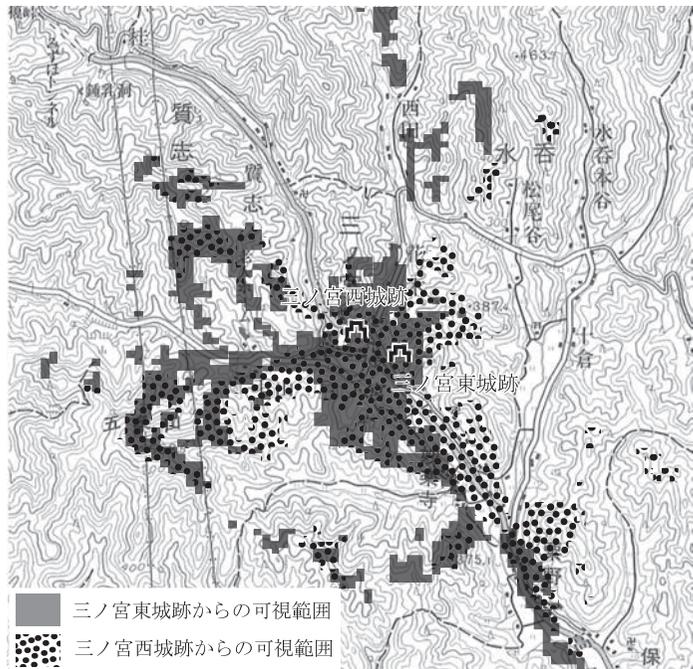


第8図 三ノ宮東城跡周辺略図

な街道とも各所で連絡している。よって報告書内でも述べた通り、三ノ宮東城跡は交通の要衝にあり、道を強く意識した山城と考えられる。

### 3. 三ノ宮東城跡の意義付け

三ノ宮東城跡は、城がつくられる山地の北西斜面に曲輪を重ねている点に特徴ある(第6図)。この北西方向には三ノ宮西



『カシミール3D』で作成したものをトレース

第9図 三ノ宮東・西城跡からの可視範囲

城跡が存在している。反対側である山地の南東斜面は切岸がなされ、縦堀が設けられるなどしており、この南東方向に防御意識が働いていたと考えられる。現在では、東城跡と西城跡の間には、国道173号と府道26号がはしっている(第8図)。しかし米軍が1947年に撮影した空撮写真などを参考にすると、本来は綾部街道の北側に並ぶように東城跡と西城跡があったと考えられる。

引原茂治が報告書内で触れているとおり、東城跡と西城跡では城からの眺望が異なっている。『カシミール3D』を用いて両城の可視範囲を復原してみると、東城跡からは府道26号の北および西への眺望が良いが、国道173号はあまり南まで見通せない(第9図)。これに対し、西城跡では府道の眺望が悪い代わりに、国道173号を東城跡よりも南まで見通すことができる。つまり三ノ宮東城跡の防御意識が働いている南西方面に対して、西城跡からのほうが見通しが良いなど、それぞれの城からの眺望は補完関係にある。

三ノ宮西城跡で発掘調査がおこなわれていないため、両城が併存した場合と、時期差があった場合、両方の可能性を引原は報告書内で挙げている。まさしくその通りで、発掘調査などで西城跡の時期が決定しない限り確定しない問題である。ただ、仮に現在の材料から推測すると、これまで述べてきたような理由から両城が併存し、補完的に役割を果たしていた可能性は低いと考えられる。その際、東城跡が南北約105m・東西約125mであ

るのに対し、西城跡が南北約65m・東西約65mと規模に大きな差があることから、三ノ宮東城跡が主たる城で、西城跡が出城的なものであったと考えられる。

#### 4. まとめ 一村の城、川の城、そして道の城―

本稿では、京丹波町内という限定された範囲であったが、中世山城の分布と地理的な条件を対照しながら検討してきた。その結果、町南部で見られるような可耕地を望む城や、由良川沿いでみられるような川を望む城、そして三ノ宮東城跡のように街道を望む城が存在する可能性を指摘した。当然、それぞれの性格は単一的なものではなく、例えば“可耕地を望みながらも街道を意識する城”のような場合もあるだろう。加えて山城の立地によって、どの性格により重きが置かれているかは変わってくるのであろう。

2章でも述べたとおり、三ノ宮東城跡は、西城跡とともに、船井郡の入口となるべく綾部街道の峠を控えた場所にある。それは当時の歴史背景といかに関連づけられるのであろうか。最後にすこし触れておくことにしたい。丹波国は16世紀初頭(永正4(1507)年)に守護細川政元の没すると、以後、細川氏内部での争いや内藤宗勝の丹波支配など、1578年に光秀が丹波を攻略するまでは動乱の時代であった。<sup>(注6)</sup> こうした動向に、三ノ宮東城跡がどのように関わったか不明であるが、例えば、付近では15世紀末に位田の乱が起こっている。これは延徳年間(1488～)年に萩野・須知・久下氏らが、守護代の上原氏と戦ったもので、彼らは京丹波町の須知城・綾部市の位田城に立て籠もっている。須知城は山陰道付近、位田城は綾部街道沿いにあり、両城間の移動には三ノ宮付近を通過する。こうした事態も、道を強く意識した城を必要とした要因と考えられる。

繰り返しになるが、具体的に三ノ宮東城跡が戦国丹波の動乱にどのように関わったかは不明である。しかし、ここまで行ってきたような検討を重ねることによって、その緊迫感をわずかでも感じるができる。

(かとう・まさし＝当調査研究センター調査課主任)

注1 三ノ宮に所在する城跡と地元伝承については、(三ノ宮地域振興会『三ノ宮城跡 三ノ宮城跡整備事業完成記念冊子』2007)に詳しい。なお同冊子は、現在インターネットでも閲覧できるようになっている。

注2 引原茂治ほか「三ノ宮東城跡」(『京都府遺跡調査報告集』第152冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2011

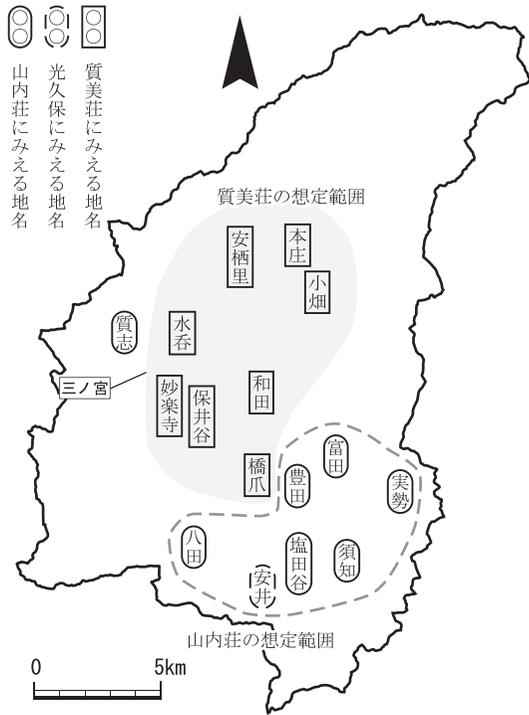
注3 石崎善久ほか(『京都府中世城館跡調査報告書』第2冊 丹波編 京都府教育委員会)2013

注4 薬師寺跡を含む。

注5 京丹波町内の荘園としては、町南部を中心とする山内荘、北部を中心とする質美荘、山内荘

から分立した光久保が知られている。三ノ宮は山内荘に含まれると考えられることが多いが、エリアとしては質美荘に近く、山内荘に見られる地名として飛び地的にある「質志」と共に注意が必要である。

注6 日吉町郷土資料館(『丹波動乱』日吉町郷土資料館)2005



第10図 京丹波町内の荘園分布